



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Codio

O K A M Z A K U M | VOL.32
C I T Y E M U S E U M S



エッセイ
リーウム再訪—ソウルの最新美術館

シユルレアリスム展—謎をめぐる不思議な旅—

岡崎市史料叢書
『中根家文書』下巻刊行

「森」としての絵画—「絵」のなかで考える
—関連イベントの記録—

ルネ・マグリット《レディ・メイドの花束》
1957年

リーウム再訪—ソウルの最新美術館

館長
芳賀徹



サムスン美術館Leeum

「リーウム」(Leeum)という名前を聞かれたことはあるだろうか。韓国最大の電子器機産業を營む財閥サムスンが、3年前、2004年秋にソウルに開設した大型の美術館である。

英語ではSamsung Museum of Artというが、財閥一家の李氏の名をミューズの代りに入れて、リーウムとしゃれたらしい。だが少ししゃれすぎて、まだ市民の間には定着していないようだ。この間の3月上旬、弘益大学との共催のシンポジウム「東アジアにおける芸術・文化交流の歴史」に参加のため、ソウルに行ったとき、仲間を連れて再訪しようとしたが、タクシーの運転手はとんと知らない。小雪のまじりだした寒い風のなかに彼はなんども出て行って、道をたずね、やっとのことであたりついた。

龍山区漢南洞というソウル市内最高級の住宅地に、斜面を生かし周囲の景観に配慮して、意外につましく建っている。スイスの建築家マリオ・ボッタが韓国古典美術を展示する巨大な植木鉢のような第一館、フランスのジャン・ヌーヴェルが韓国と欧米の現代美術を収める黒いスティール壁の第二館、そしてオランダのレム・コールハースがガラスの多い児童教育文化センターを、それぞれに設計。最前衛の三者による三館はまったく雰囲気を異にしながらも、エントランス・ホールで仲よくつながっている。まずはこの建築だけでも注目を浴び、大いに話題になった。

第一館の高麗や李朝の青磁・白磁の壺や皿は、オーナー一族が長年にわたって蒐集した名品というだけあって、国宝や重要美術品を数多く含んで、まことにすばらしい。幾時間もかけて作品と対話し、その形と色のゆたかさ、高貴さに堪能することができる。なかには李朝の壺で、そのふくよかな立ち姿と染付けの草花の優雅さに、『チャングム』の女優イ・ヨンエさんを連想し、私がその名を献じて楽しんだ作もあった。この陶磁の展示にくらべると、近世の絵画と書は当方がその歴史に

暗いこと也有って、心を惹かれる作が乏しかった。

第二館では、韓国近代絵画は小品ばかりが多くて、案外淋しい。李仲燮の牛の顔の油絵など、「日帝」時代末期のそのきびしい生涯を思わせて、なつかしくも心を動かされるが、これも小さすぎる。
キム・ハンギ
ナム・ジョン・パク
イ・ファン
金煥基や白南準や李禹煥など国際派の油彩やオブジェの大作が並ぶ部屋に移って、はじめてほっこりし、見る者の身も心もようやく活気をおびてくる。金煥基のためにほど近い住宅地の一隅に瀟洒な個人美術館があり、昔ソウルに来るたびに韓国人の旧友たちとそこを訪ねては、パウル・クレーを思わせるような彼の色彩の深々とした美しさを楽しんだものだった。

現代欧米作家の展示には、ジャコメッティのブロンズ立像があり、マーク・ロスコが2点も並び、フランシス・ベイコンの大作もあり、ゲルハルト・リヒターやヨーゼフ・ボイス、それにフォンタナのちょっと珍しい色合いの大画面まであって、十分に充実している。たった今のダミアン・ハーストにまで至るというラインナップで、日本の美術館、とくにわが岡崎市美博などから見れば、うらやましいような常設展示だ。

だが、これらの現代作品は、過去数年の間に何人かの批評家、識者の推薦のもとに、かなり急いで買い集めたものかもしれない。すると、サムスン財閥を相手に、間に入った内外のアート・ディーラーたちは、相當に甘い汁を吸ったのであるまい。そういえばこの第二館はなんとなく金臭がある。ステンレスの壁に刻まれた縦長の窓の外に、土を削りとったあとの崖をおおう瓦の壁を見やりながらそんなふうにひがむのは、経済面でも民主化・平準化されて久しい日本からの観客であった。

同僚にそのひがみを語ると、美術史専門の彼女は、いや、このリーウムが創立の当初から文化財の保存修復研究室を併設したことは先見の明があり、日本の美術館博物館も早くこのよき先例に学ぶべきだ、と反論して、私を納得させた。

『中根家文書』下巻刊行

解き明かされる岡崎藩寛政改革の全貌



中根忠容画像

岡崎藩士の中根家に伝わった古文書を翻刻してまとめた岡崎市史料叢書『中根家文書』下巻がこのたび岡崎市から刊行されました。本巻は平成14年に刊行された上巻に続くものです。本巻では岡崎藩の藩政改革を中心とする434点が収録されています。ここでは収録資料の中心となる藩政改革の内容について紹介しましょう。

中根家は岡崎藩本多家の家老・番頭を勤めた家ですが、同家の8代目の隼人忠容（1752～1830）は18世紀末の寛政年間に藩財政改革のリーダーとして活躍します。藩債32万両余の返済とともに、破綻した藩財政の再建に果敢に挑戦しました。中根家に伝来した資料群の中心をなすものは、この改革時に忠容が作成させた覚書や忠容がやり取りした書状の類です。中根家ではこの忠容の改革の功績を後世に伝えるために、改革に関する史料をメモ程度の書付まで含めて大事に保管してきました。この残された史料群により、岡崎藩の寛政期財政改革の全貌が明らかにされつつあります。

中根忠容が改革に着手するのは寛政5年（1793）8月からです。厳しい家中僕約と江戸商人三谷喜三郎からの資金援助をうけながら藩財政の再建が試みられます。結果は一定の成果を納めるものの三谷の破産で改革は断絶します。

この6年半ほど続けられた改革のポイントは、借財関係が蓄積した大阪の蔵元から江戸商人の三谷に蔵元の転換を図ることにより財政再建を行おうとするものでした。その転換は、当時の幕府が寛政改革で意図した大阪に対する江戸市場の向上化に沿うものであり、幕府の方針に沿いながら財政再建を図ろうとするものでした。

忠容らは当初、財政難を乗り切ろうと松平定信など幕閣に接近し、年貢収納高の高い土地への転封内願を出します。しかし、当時、松平定信とともに寛政改革の中心人物の一人でもあった本多忠籌は、転封ではなく本多家の家中人員を半減と

する方針を出します。これに対して譜代重臣を多く抱える岡崎藩では家中の削減はできないとして反対し、藩主本多家の一族である本多忠可を通じて本多忠籌に交渉を行います。結果は家中削減を避け、徹底した僕約を行うことになり改革がスタートします。

忠容は僕約とともに藩債返済の一時的停止を行い、年貢収納米のみでの藩財政の運用を試みます。藩は年貢米を払米してその代金を三谷に入金、三谷から適宜に資金援助を受けて支出に廻すというものです。

改革は江戸商人三谷喜三郎の破産、中根忠容の隠退により断絶、その後の岡崎藩では大坂蔵元が復活します。幕末の安政5年（1858）には大坂蔵元からの借用高9万5000両、江戸借用高4万6000両などで藩債は合計33万両余に達するようになります。忠容が改革について「坂に車を押すが如く成る御勝手」と記しているように、油断して気をゆるめれば直ぐに借財が嵩んだのです。藩財政の破綻が慢性化するなかで、果敢に再建に挑んだ中根忠容の改革の足跡は、途絶したとはいえ岡崎藩藩政史のなかでも一際光芒を放っているといえましょう。

中根家文書下巻には、以上の財政改革資料のほかに、忠容の日記、家中騒動に関する資料を掲載しています。とくに、家中騒動は、藩主の一族である本多忠可、仮養子選定、留守居役湯川四郎右衛門寵免をめぐっての藩内権力争いに関する資料です。これらは財政改革の推進体制を考える上でも関連する資料です。併せて御一読いただければと思います。

なお、当館では『中根家文書』上・下巻刊行を記念して企画展「隼人がゆく一藩政改革にかけた岡崎藩士の世界」を、本年12月8日から翌年2月11日まで開催予定しております。

編 集 中根家文書編集委員会

（代表愛知教育大学名誉教授新行紀一）

編集協力 中根家文書翻刻会

発 行 岡崎市



シュルレアリスム展

— 謎をめぐる不思議な旅 —

学芸員
村松
和明

現実とはいっていい何なのだろうか。現実と夢の境界は果たして存在するのだろうか。現実をめぐる、このような謎に正面から向き合った芸術運動が、シュルレアリスム（超現実主義）であった。第1次世界大戦など西洋の近代社会の歪みが露呈し始めた20世紀初頭、パリに集まつた芸術家たちによって起こされたこの運動は、1920年代以降、世界各地に拡がり、文学、美術、写真、映画など、様々な芸術分野に深く広く影響を及ぼした。

本展は、シュルレアリストの作品を積極的に収集している当館と、宮崎県立美術館、姫路市立美術館のコレクションを核に、国内の美術館の協力と連携によって実現したものである。

総数152点が並ぶシュルレアリスム展は、国内最大規模といってよいだろうが、その過半数にあたる77点が当館のコレクションである。

当館は1996年に「心を語るミュージアム」をコンセプトに開館し、間もなくシュルレアリストの作品を収集し始めたが、それを10年に渡って継続させた結果、今では国内屈指の系統づけられたコレクションとなった。

シュルレアリスム関連の企画展も何回か開催してきた。1998年のパリ、ポンピドー・センターの協力による「シュルレアリスムの巨匠展」を皮切りに、2001年にルネ・マグリットやポール・デルヴォーを扱った「ベルギーの巨匠5人」と、「マックス・エルンスト展」を、2002年に「ミロ展」、2004年「マン・レイ展」、2005年「アルプ展」と継続して開催している。このような10年にわたる収集と研究の成果が、今回開催する「シュルレアリスム展」には大きく反映されている。

この展覧会では難解とされる傾きのあるシュルレアリスムを、より理解しやすく紹介していることも特色で、以下のような構成をしている。

序章では「ようこそシュルレアリスムの世界へ」と導入し、日本では「シュール」という略語の多用によって「シュルレアリスム（超現実主義）」の本意が見失われつあることから、シュルレアリスムは「眞の現実を求めた」ということに触れている。ここではシュルレアリスムの先駆的存在、ジョルジオ・デ・キリコの形而上絵画《イタリア広場》(fig.1) や、マルセル・デュシャンなど、ダダイストたちの作品が並ぶ。

展示構成も過去に行われてきたような作家別の紹介ではなく、その特性、たとえば専門的にいうところのオートマティズムを「意識を超えて」、オブセッションを「心の闇」、デペイズマンを「夢の遠近法」、プリミティヴィズムを「無垢なるイメージを求めて」などと、身近な言葉に言い換えて4つ



fig.1 ジョルジオ・デ・キリコ《イタリア広場》
1914年 諸橋近代美術館蔵

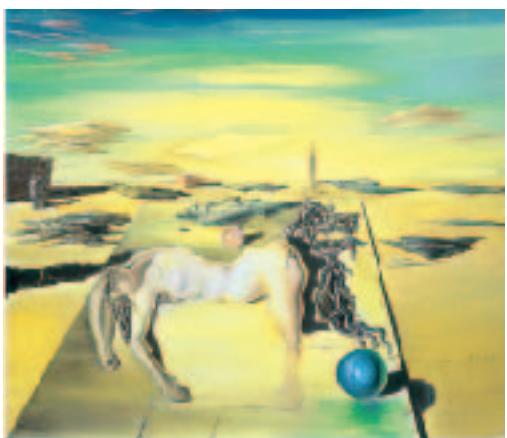


fig.2 サルバドール・ダリ《姿の見えない眠る人、馬、獅子》
1930年 ポーラ美術館蔵（ポーラ・コレクション）



fig.3 マックス・エルンスト《森》
1927年 岡崎市美術博物館蔵

の章で展開している。

「第1章：意識を超えて」では、シュルレアリストたちが理性の統制をのがれ、人間の表現行為の本質に迫ろうとしたことを紹介。サルバドール・ダリの《姿の見えない眠る人、馬、獅子》(fig.2)のように、ダブル・イメージ(多重影像：ダリによれば「偏執狂的一批判的方法」)の手法を駆使した作品や、イヴ・タンギーの荒漠たる絵画空間に見られるような、心に自然と浮かび上がってきたような映像の絵画が並ぶ。

「第2章：心の闇」では、生と死、エロティシズムなどの欲望や恐れなど、彼らが心の闇ともいえる部分を描き出そうとしたことを紹介。エルンストの《森》(fig.3)に込められた自然に対する畏怖の念や、ポール・デルヴォー《海は近い》(fig.4)に見られるような孤独や不在、虚無ともいえる世界を提示。それぞれの画家が秘めているオブセッションをかいま見させる。

「第3章：夢の遠近法」では、マグリットの《現実の感覚》(fig.5)に代表されるように、身近なものを配置転換させることでありえない状況を作り出し、既成概念に衝撃を与え、そこから新たな意味を見いだそうとしたことを紹介。

最後の「第4章：無垢なるイメージを求めて」では、オートマティスムとも通じ合うジョアン・ミロの《人物》(fig.6)や、ハンス・アルプの有機的な抽象彫刻など、きわめて純粋な造形作品がならび、人間の表現に対する根本的な問いを含みつつ、これら4章を通して、シュルレアリズムの全体像を読み解いてゆくという構成になっている。

今回の特色として、国内では紹介される機会の少なかったシュルレアリストたちが網羅されていることも忘れてはならない。例えば、魔術的表現で知られるクルト・セリグマン、片眼を失って幻視世界を描き続けたヴィクトル・ブローネル、プリミティヴ(原始)を体現したヴィフレド・ラムなど、また女流画家では、例えばドロテア・タニング、レオノーラ・キャリントン、メレット・オッペンハイム、ケイ・セージなども多数展示される。

本展は、このように多彩であるというだけではなく、国内に、質、量ともにこれだけのシュルレアリストの作品が存在しているということをあらためて感じさせるものである。

20世紀初頭に「超現実(シュルレアル)」に希望を託しつつ、純粋な生を求めて様々な表現を試みたシュルレアリズム。その本質について改めて触ることは、今日、我々が現実をより豊かなものにして、生き抜いていくための大きな示唆を含んでいるように思われる。

本展は、岡崎市美術博物館の10年にわたる収集・研究のひとつの成果といえるが、美術史上に見るなら100年の時空をさかのぼった「謎をめぐる不思議な旅」となることだろう。



fig.4 ポール・デルヴォー《海は近い》
1965年 姫路市立美術館蔵



fig.5 ルネ・マグリット《現実の感覚》
1963年 宮崎県立美術館蔵



fig.6 ジョアン・ミロ《人物》 1942年 姫路市立美術館蔵



「森」としての絵画——「絵」のなかで考える

2月10日から3月25日まで開かれた企画展＜「森」としての絵画——「絵」のなかで考える＞は、今この時代における「絵画」の様々な試みを紹介しようというもので、出品作家はみな現在活躍中の方ばかり。そこで、作家の生の声を聞き、その制作の様子を少しでもリアリティーをもって感じてもらえるようにと、シンポジウムに始まり、対談、作家トーク、ワークショップと会期中には多くのイベントを開催しました。そこで、この場を借りてそれらの内容の一部をご紹介したいと思います。

シンポジウム：2月10日(土) 伊藤存×佐藤勲×額田宣彦×丸山直文（司会：天野一夫）

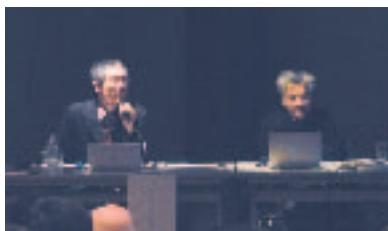


4人のパネリストが、それぞれ15分程度、ここ10年の自作の変遷について話を

され、つづいてディスカッションへ。60年代生まれの佐藤・額田・丸山三氏からは、アメリカ型のモダニズムの作品（抽象表現主義）とその言説（フォーマリズム）が、制作を始めるうえでいかに避け難いやっかいな存在であったかが語られ、またそれを受けて伊藤さんからは、そうした問題が、ある意味対象化され、切迫感を伴うような事柄ではなくなっていることが述べされました。ほかにも興味深い意見交換が数多くなされました。

対談：2月25日(日) 岡崎乾二郎×中ザワヒデキ（司会：天野一夫）

2人のパネリストが、それぞれ15分程度、初期から



現在までの作品について話をされ、その後対談へ。話題の中心は、中ザワさんの主張する絵画の二元論について。色彩VS線描というルネサンス以来続く二項対立の図式を、デジタル時代におけるパソコンソフトの「アドビ・フォトショップ」（画面を画素の集まりとして構成するペイントソフト）と「アドビ・イラストレーター」（図形をベジェ曲線として構成するドローソフト）という相反す

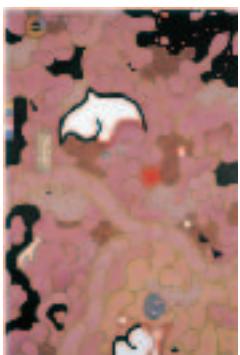
る二つの描写システムに対照させながら、方法論的に絵画を組み立てようと試みる中ザワさんに対して、さらに岡崎さんがそれを客観的に解説してみせる場面もありました。また忘れられないのは、マネの《マクシミリアンの処刑》を引き合いに、絵画が否応なくその時々の政治状況と深く結びついてしまうという事実を岡崎さんが指摘されたことでした。

作家トーク全5回：2/24 染谷亜里可・法貴信也 3/3 吉澤美香・手塚愛子 3/21 越前谷嘉高

各回とも作家の方がスライドを見せながらこれまでの作品の変遷を語り、そ



の後展示会場で出品作品を前に説明をされました。実際の作品が目の前にあることから、質疑応答も活発に行われ、とりわけ越前谷さんの回では、一見すると非常に抽象的な作品でありながら、それぞれの形や模様が何等かの具体的な意味から派生していることが説明されたため、謎解きを楽しむかのように多くの質問が寄せられました。



『雲と水との旅』は、明治時代にチベットを訪れた彗海和尚の物語を視覚化した作品。白い鳥型は彗海和尚で、よく見ると羊や氷河、石窟仏像らしき造型が分かる。

ワークショップ全3回：2月18日(日) 杉戸洋「杉戸さんと一緒に絵具で塗ろう」



絵画面の中に、入れ子状に舞台空間を描き込んだり、空虚感の漂う空間のなかに、スケールの異

なる極小の飛行機や船を描いたりと、杉戸さんは空間の奇妙なズレを巧みに表現してみせます。彼の描く、現実と非現実のはざまにあるような浮遊感を漂わせた絵画を、ワークショップを通して実

感してもらえないものかと相談したところ、杉戸さんの方から「絵具で塗る」という内容の提案がありました。“描く”という具体的なイメージの創出を伴う行為ではなく、“塗る”というイメージの描写を離れた作業を繰り返すことによって、かえって面白い画面が生まれるのではないかとのことだったのです。

当日は、二枚のカンヴァスが用意され、一方には、ひたすら四角の色面を置くことが、もう一方には、ひたすら横のストライプを引くことが指示されました。限られた絵画面を20人の参加者が共有するのですから、そこは一種の戦場です。とりわけストライプのカンヴァスでは、先に引かれていた線の上に、別の参加者が別の色で別の太さの線を重ねていき、画面は目まぐるしく変化を繰り返していきます。他方、色面のカンヴァスでは、大小・色合い様々な四角が、画面のそこかしこに置かれていくため、徐々に豊かな表情が現れ出てきました。参加者の興も乗り、変化し続ける画面を前に落としどころを見極めるのに困ったものの、最後は杉戸さんの一声で作品が「完成」。そして、通常では考えられないことですが、このできたての作品（絵具が乾いたのを確認してから）を杉戸さんの出品作品と一緒に入れ替えてみせ、参加者に、自分たちの作品が、展覧会という空間のなかでどのように見えるかということを体験する機会が提供されました。



O JUN「風景画のヒミツvol. 2」：3月11日(日)



O JUNさんの作品といえば、記号のような簡略化されたイメージが、背景描写も何もない白い紙の上に描かれた絵画をまず

思い起こすことでしょう。こうした不思議な画面作りをされるO JUNさんが行ったワークショップは、丘に立つ当館のロケーションを加味した「風景画のヒミツ」と題するもの。「風景とは何か?」「どこからどこまでが風景なのか?」「人を描いた絵は、肖像画であって風景画ではないのだろうか?」という問い合わせのもと、参加者には、双眼鏡や物差しといった距離を測る道具を持参してもらい、まずはそれらを使いながら、自由に風景画を描いてもらいました。その後、O JUNさんが、それぞれ距離の異なるもの同士をいかに一枚の平面のなかに圧縮するのか、参加者の前で実演しながら、

そのヒミツを披露。決まりきった描き方や構図に囚われることなく、見る人が、描く対象を取捨選択しながら様々に組み合わせて風景画を作り上げればいいんだというO JUNさんの言葉は、描くことに戸惑いを感じる参加者の背中を押してくれたものでした。青空や山並の中に、眼に焼きついて離れなくなったという屋外展示品のプラレールの青い線を描き込んだO JUNさんの風景画は、見事にその楽しさを証明してくれるものでした。



パラモデル「パラモデルと一緒にプラレールで遊ぼう」：3月18日(日)

ワークショップの最後を飾ったのは、アートユニット、パラモデルによる「パラモデルと一緒にプラレー



ルで遊ぼう」。今回の展覧会の中で最も話題を呼んだとっても良いのが、彼らの制作したプラレールによる巨大作品。通常の展示室を飛び出して、屋外の階段から恩賜池まで広がる作品は、展示室を出たお客様の心に、堅苦しい「美術」の枠組みを超えた根源的な楽しさや驚きの感情を呼び起したようでしたが、彼らによるワークショップは、こうした楽しさを共有できる最良の機会となったのではないかでしょうか。前2回のワークショップと異なり、この回は家族単位での参加が殆ど。「宇宙の植物をつくる」というテーマのもと、思い思いに地面の上にプラレールがつながれ、その造形の多様さは非常に目に楽しく、また美しいものもありました。そして、実際にレールの上に電車を走らせた後に、参加者全員の記念撮影—パラモデルの写真作品と



なるのですが一を行い、コマ撮りされたワークショップの様子を鑑賞。無心に創ることを楽しめるワークショップとなりました。

展示作品だけでなく、さまざまな角度から展覧会を楽しんでいただけたことと思い、こうした場に積極的にかかわっていただいた出品作家の方と参加者の皆さんに厚く御礼申し上げます。

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2007年4月7日(土)～2007年5月27日(日)

シュルレアリスム展　—謎を巡る不思議な旅—

シュルレアリスムは、心を開放することで自由と変革を求めた20世紀を代表する芸術運動です。国内のシュルレアリストの優品を一堂に集めて紹介します。

2007年6月9日(土)～2007年8月19日(日)

文様の世界展

絵画や美術工芸作品に施された動植物・幾何学などの様々な文様の種類に焦点をあて、時代の変遷をたどりながら、文様に秘められている意味について紹介します。

●開館時間／午前10時～午後5時 (10月1日～5月31日)

午前10時～午後6時 (6月1日～9月30日)

〈入館は閉館時間の30分前まで〉

●休館日／毎週月曜日 (祝日に該当する場合は、その翌日)

以後の休日でない日)

年末年始 (12月28日～1月3日)

※展示替えのため臨時休館することがあります。

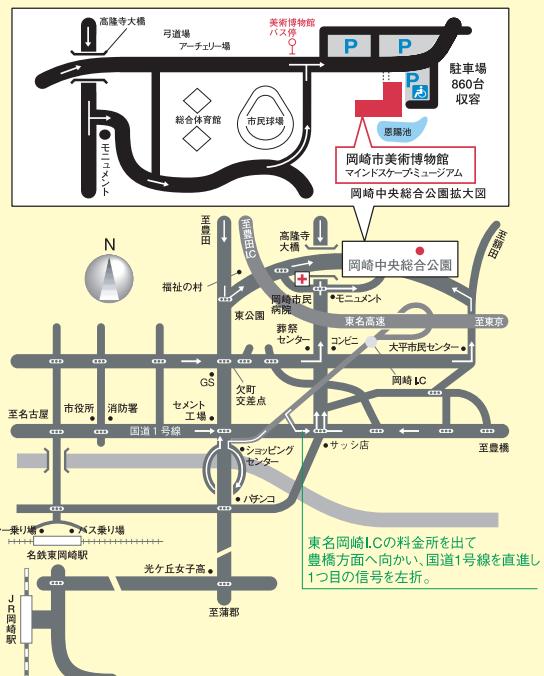
◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、

(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分

◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分

JR岡崎駅東口から約20分

◎自家用車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

●Arcadia 第32号 ●2007年4月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)



岡崎市美術博物館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1 岡崎中央総合公園内

TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.html>



R100 本紙に古紙配合率100%
再生紙を使用しています。